

指導情報を保護者に提供するためのビデオ映像加工の試み[†]

植木克美*・後藤 守**・渡部信一***

北海道教育大学大学院学校臨床心理専攻/東北大学大学院教育情報学教育部*
北海道教育大学大学院学校臨床心理専攻**・東北大学大学院教育情報学研究所***

本研究では、保護者に指導情報をわかりやすく、効果的に伝えるためにビデオ映像の加工を試みた。具体的には、小集団指導場面のビデオ映像から対象シーンを複数枚の連続する静止画像として取り出し、それに子どもの気持ちと状況の説明文を添えてプレゼンテーション資料を製作した。保護者の反応を指導日誌の記録から検討した結果、①指導者が伝えようとした子どもの行動変化を保護者に認識させることができた、②保護者が子どもの気持ちを自発的に読み取りそれを言語化できることがわかった。この結果から、ビデオ映像を「瞬間（1カット）」の記録である静止画像として取り出し「瞬間」と「瞬間」を順番に提示し、説明文を付けることにより、指導者の伝えたい情報を明確に伝えることができたと考えられた。

キーワード：ビデオ映像、保護者、教材、静止画像、情報提供

1. 問題と目的

幼稚園、それに続く小学校という教育機関は子どもが親元を離れ、一定の時間を過ごすことが前提となる。保護者にとっては自分自身の目で子どもの様子を観察できないことにより、学校において子どもがどのような経過しているかについて不安をもつ場合がある。このような保護者の不安へ対応するために、どのような情報をいかに提供するかが教育的課題のひとつとなる。

現在では、情報メディアの一般社会への普及に伴い、多くの教育機関が Web サイトを使って学校に関する一般情報の発信をしているが、保護者が最も望んでいる情報はやはり子どもの活動の様子であるという（石塚ら 2005, 堀田ら 2005）。また、教育場面をインターネットでリアルタイムに配信し、保護者が自分自身の目で観察できるようにしている教育機関もある。

このような状況の中で、現在も多くの教師により活用されているのがビデオ映像である。ビデオ映像は被写体となる事象を生起している時間と空間から切り取り保存し、後から情報を保護者へ提供することを可能にする。そして、その情報には視覚情報と聴覚情報が統合されている。さらに、ビデオ映像により得られる情報には動きが伴い、その事象のプロセス、変化を追うことができる。つまり、ビデオ映像には連続した時間の流れがある。PELLEGRINI (1996) によれば、ビデオ映像は連続的記録に最も有効で実用的であるとされる。

このようにビデオ映像では、実際にその事象が生起した場面、状況により近い情報を提供することが可能であり、その具象性の高さが利点となる。したがって、それを見る者にとってはより「生の子ども」を感じられ、その行動の意味を周囲の状況からプロセスを追って理解できるという利点がある。

その反面、情報量が多いため、情報提供者（教師）の意図とは関係なく視聴者（保護者）の興味、関心に

2006年2月10日受理

[†] Katsumi UEKI*, Mamoru GOTOH** and Shinichi WATABE*** : An Attempt to Process Video Images for Providing Information on the Instructional Situation to Parents

* Hokkaido University of Education, Graduate School of Education, Special Course of Clinical Psychology and School Education, 1-3, Ainosato, 5-3, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido, 002-8502 Japan / Tohoku University, Graduate School of Educational Informatics, Education Division, Kawauchi, 27-1, Aoba-ku, Sendai, Miyagi, 980-8576 Japan

** Hokkaido University of Education, Graduate School of Education, Special Course of Clinical Psychology and School Education, 1-3, Ainosato, 5-3, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido, 002-8502 Japan

*** Tohoku University, Graduate School of Educational Informatics, Research Division, Kawauchi, 27-1, Aoba-ku, Sendai, Miyagi, 980-8576 Japan

Vol. 30, No. 4 (2007)

429

よって映像が切り取られ、読み取られていく欠点がある。つまり、ビデオ映像による情報の提供では、情報の具象性が高く情報量が多いために、教師が伝えたいことが伝わらずに、場合によっては保護者自身の評価の枠組みで感想が述べられ、子どもが評価されがちになるという課題がある。

これまで著者らは、社会性の発達に支援を必要とする子どもたちに対する指導実践の場で保護者へ情報提供するためにビデオ映像を活用してきた。視聴中の保護者は、映像に集中し子どもの行動を熱心に目で追い、言葉数は極めて少なくなる。口頭による補足説明に対しても、頷くという反応にとどまることが多かった。そして、視聴後に感想を求めると「楽しそうだった」「がんばっていた」という肯定的な感想が述べられることは多かったが、細かな行動の変化について語られることはなかった。また、保護者と著者らの間で、それぞれの子どもの理解や教育活動についての理解を深め合うまでには至らなかった。

そこで本研究では、保護者が教育活動と子どもの行動変化をより理解しやすいように、ビデオ映像の利点である連続した時間の流れを提示し、なおかつ情報提供者（教師）の意図が明確になるように特定シーンの映像を静止画像に加工し、それを2枚以上セットにして提示するという試みを実施した。本研究では、この試みに対する保護者の反応を検討し、その効果について実証的に検証することを目的とする。

2. 研究の方法

2.1. 保護者への情報提供の概要

著者らは、2005年4月から11月まで隔週で、社会性の発達に支援を必要とする小学校1年生 男児6名を対象とした小集団指導を療育機関で実施した。指導者は3名で、このうち2名が著者らである。

指導には、著者らが開発し体系化を進めている集団指導「行動空間療法」を用いている（後藤ら 1984）。図1は、指導場面を図に表したものである。室内の真ん中に舞台が置かれ、右奥に使用する遊具（大型組み立てブロック）を重ねておいてある。

この指導実践では、定期的に保護者へ指導の様子について情報提供している。情報提供はいずれも保護者全員を対象にしてグループで実施する。

第1回目の情報提供は、1回40分間の指導でどのようなことを行っているのかという、指導内容とそこで子ども達の活動の様子を保護者へ伝えることを目的

とした。これは2005年5月17日に実施し、通常のビデオ映像により情報提供を行った。そのビデオ映像は、2005年4月26日に実施した小集団指導を撮影したものをを用いて、40分間の指導を15分に編集した。具体的には、①指導内容の概要、②子ども達の活動の概要、の2点を伝えることを目的として編集作業を著者が行った。したがって、編集されたビデオ映像は、40分間の指導のダイジェスト版となる。

第2回目の情報提供は、指導を開始してから3ヶ月が経過する2005年7月14日に実施した。ここでは、小集団指導における子どもの行動を詳細に伝えることを目的とした。具体的には、2005年5月31日及び6月14日に実施した小集団指導を中心にして情報提供した。①子どもの行動変化、②子どもの行動とその気持ち、の2点を保護者へ情報提供した。その際に、保護者が子どもの行動変化やその気持ちを理解しやすいように、撮影したビデオ映像を静止画像に加工し、それを連続して提示した。本研究で検討するのは、この第2回目の静止画像による保護者への情報提供についてである。

なお、第3回目の情報提供は、2005年11月29日の最後の小集団指導の終了後に、静止画像を貼り付けた個人用アルバムを使いながら行った。

2.2. 手続き

2.2.1. ビデオ映像の記録方法

本研究では、以下の考えに基づいてビデオ映像を記録した。

渡部・小山（2002）がふれているように、ビデオにはアングルとフレームがあり空間的な制限が生じ、ビデオ映像によって得られる情報には制約がある。また、小川（1994）は保育研究に役立つビデオ映像を残すために、まず保育状況全体を視野に入れて撮り、その後特定の場に視点を絞っていき（ズームアップする）、記録者の視点が明確になる取り方が望ましいと述べている。

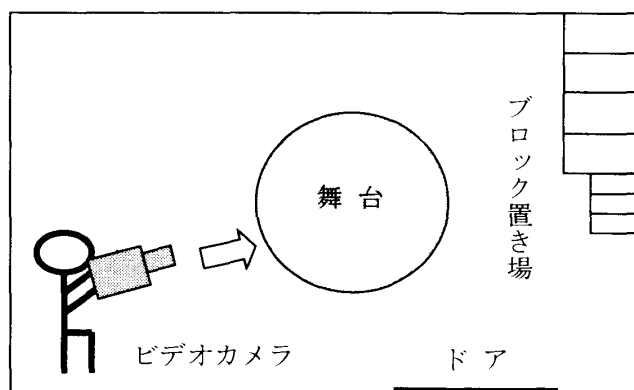


図1 研究対象となる指導実践の場面

本研究の場合は、小集団指導の目的に合わせてできるだけ集団全体の活動が画面に入るように部屋の隅に記録者が立ちビデオカメラをかまえ、斜めの角度から映像を記録するようにした。具体的には、図1のように左端手前にビデオ記録者がいる。記録者には、ズームアップして特定の子どもだけを映像に収めることがないように、さらにできるだけアングルとフレームの動きを少なくして、集団全体が1つの画面に収まるように伝えた。

2.2.2. 静止画像を活用したプレゼンテーション資料の製作

第2回目の情報提供に用いる静止画像は、次の手順でプレゼンテーション資料にして製作した。

まず、ビデオ映像から、対象とする場面をビデオキャプチャーで静止画像にして取り出す。そして、それに説明文を添え保護者用のプレゼンテーション資料を製作する。プレゼンテーション用に使用したソフトは市販のMicrosoft office PowerPoint 2003である。製作の具体的手順を以下に示す。

- ①著者が自分で書いた指導日誌を参照しながら、ビデオ映像を最後まで通して視聴し、ポイントになる場面をノートにピックアップする。
- ②ピックアップした場面を再生し、その場面の静止画像をビデオキャプチャーで5枚程度作成する。
- ③②で作成した静止画像のうちそのシーンを説明するのに有効なものを2～3枚選択する。そこに、その場面の題名と説明文をテキストとして作成し、添付する。そして、それらを順番に保護者へ提示できるようにプレゼンテーション資料を製作する。1つの場面についての複数の静止画像を順番に見せることによって、その場面で起きている事象のプロセスを強調できると考えた。

2.3. 分析の方法

本研究では、静止画像による情報提供の効果を実証的に検証するために、著者が書きとめている指導日誌を用いる。

指導日誌は、毎回の指導を実施したその日のうちに、著者が指導者として参加しながら観察したことを思い起こし、パソコンに書き記したものである。記載する内容は、①観察された活動の様子、発話内容を子ども毎にまとめたもの、②指導者として指導の内容、展開について考察したことをまとめたもの、③療育機関の職員から得た情報をまとめたもの、④その他のこと(保護者から得た情報や指導後のミーティングの内容など)をまとめたもの、の4つである。保護者への情報

提供を行う際には、①を「観察された様子と発話内容を保護者毎にまとめたもの」に換えて書き記している。

ここでは、この「観察された様子と発話内容を保護者毎にまとめたもの」を、プレゼンテーション資料に取り上げるシーンと対応させて再構成する。そして、それをプレゼンテーション資料に対する保護者の反応として用いる。なお、情報提供の場に参加したもうひとりの指導者にこれを読んでもらい、保護者の反応について確認作業を求め、信頼性を確保できるように努める。

さらに、保護者の反応に対して、書き溜めている指導日誌を参照しながら考えたことをまとめる。そして、静止画像による情報提供の効果を検討するための分析資料として活用する。

3. 結果と考察

3.1. 静止画像による情報提供に対する保護者の反応

第2回目の静止画像による情報提供(2005年7月14日実施)には6名の保護者全員が参加している。静止画像は、プロジェクターとスクリーンによってプレゼンテーションを行った。なお、司会進行は著者が行った。静止画像による情報提供に対する保護者たちの反応は、次の通りであった。

静止画像による情報提供では、保護者の集中力が途切れることはなく、静止画像、テキストの提示に合わせて保護者の視線が動いている様子が観察された。この点については、2ヶ月前に実施したビデオ映像による情報提供でも同様であり15分間集中して視聴していた。プレゼンテーションを視聴している間の保護者たちの様子は、話し手である著者や著者の問いかけに応じている保護者の発話に静かに耳を傾けたり、笑ったりと、参加者全員が話し手やその時の話の内容、プレゼンテーションに注目していた。発話の内容は、プレゼンテーションに取り上げた具体的なシーンやそれにかかわる家庭や学校での子どもの様子が中心になっていた。たとえば、指導場面で観察された友だちとの関係性が、通学している小学校でも認められるといった保護者からの話があった。

なお、プレゼンテーションに対して、「わー」「すごいね」と驚きの声をあげた保護者がいた。

3.2. 子どもの行動変化に対する保護者の反応

3.2.1. 製作したプレゼンテーション資料

第2回目の情報提供では、子どもの行動変化を伝えるために2つのプレゼンテーション資料を製作した。このうち、ここでは対象シーンが10分以上に渡った次のプレ

ゼンテーション資料について検討していくことにする。

このシーンは、2005年6月14日の小集団指導で観察されたものである。その概要は以下の通りである。子どもによって野球ボールが持ち込まれ、ふたりの子が野球ごっこを開始したところから、ブロックで作った他の子どもの車にその子ども達が興味を示し、野球ごっこをやめて車に乗り出したところまでを扱っている。対象シーンは13分という長時間に渡るので、これを3つのシーンに分けることにした。図2が製作したプレゼンテーションであるが、矢印は提示する順番を現している。①「ふたりの野球ごっこ」では、静止画像はA、B、Cの3枚を使用している。まず、1枚目のAでは野球ボールが持ち込まれた最初のカットを提示し、次に野球ごっこをしている子とそのそばでブロックを使って車を組み立てたり(B)、車に乗っている子どもや指導者の姿(C)を対比させている。次の②「おもしろそうだなあ」では、1枚の静止画像Dを使い、野球ごっこをしている子がブロックで車を作るのに興味

を示し始めたことを表すために、その子の気持ちを題名にしている。その静止画像Dは、他の子どもの車を見て、車を作っているチームのところへ野球ごっこをしている子がやってきたカットである。そして、3つ目の③「のせて!!」では、2枚の静止画像E、Fを使って野球ごっこをしていたふたりの子が順々に他の子どもの車に乗り始めたところを情報提供している。この時の題名は車に乗りたいという子の気持ちを強調して「のせて!!」とつけている。まず、最初に野球ごっこをしていたふたりの子のうちのひとりが車に乗るカット(E)を、そして、次にもうひとりの子がそれに続いて乗ろうとしているカット(F)を使っている。なお、静止画像は①、②、③のグループ毎に1枚のシートに矢印の順番に重ねて提示した。

3.2.2. 保護者の反応

上述のプレゼンテーション資料に対する保護者たちの反応は、次の通りであった。

プレゼンテーションは著者が口頭で説明を加えなが

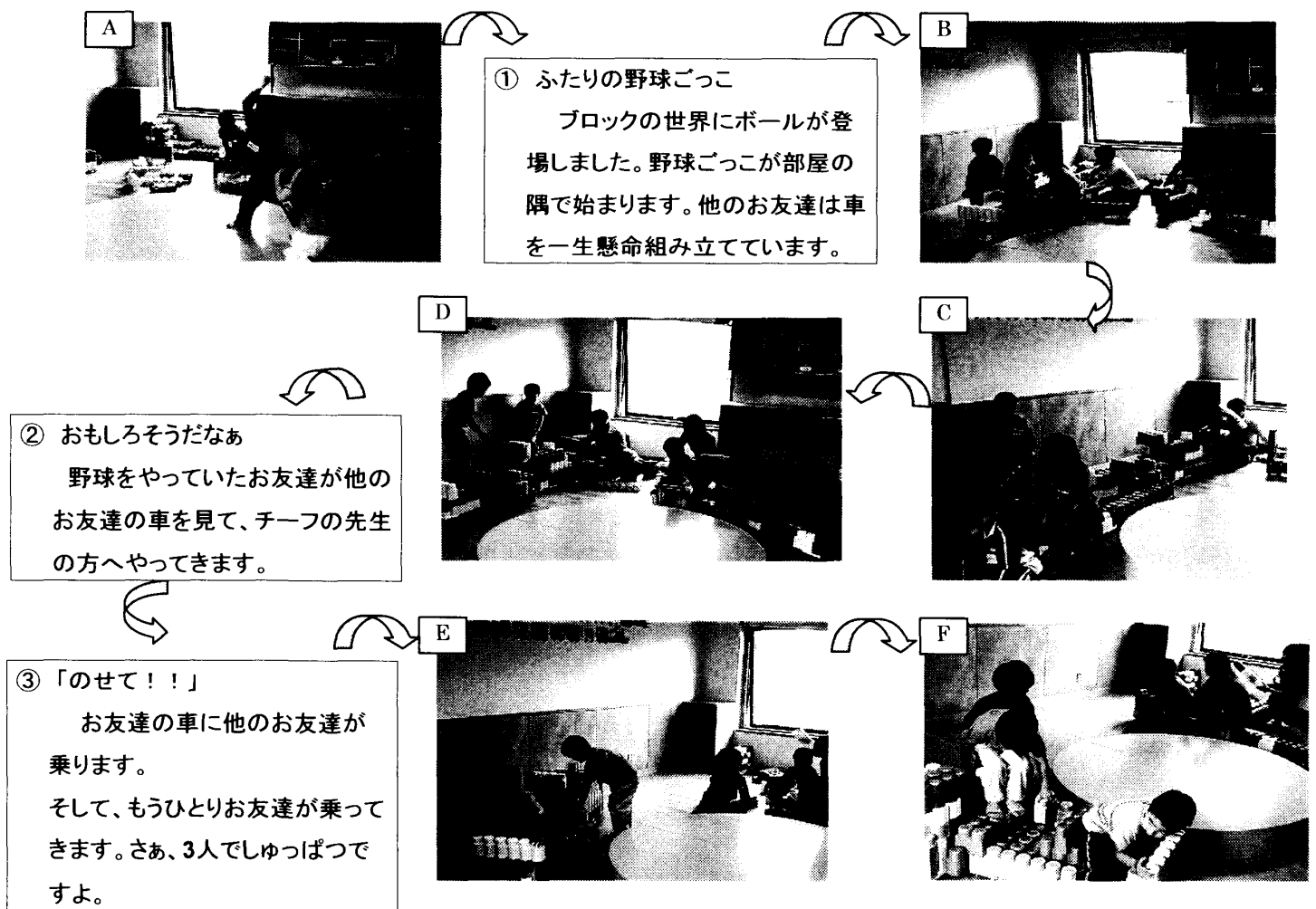


図2 子どもの行動変化についてのプレゼンテーション資料

ら進めた。まず、1枚目 A の静止画像が提示されるとボールを持ち込んだあきお（仮名、静止画像 A 舞台上のボールをもって右手をあげている子ども）の保護者が「あきおがもってきたんだ」とことばにした。それに続けて、あきおの保護者は子どもが野球を好きで家でもしていることを話す。著者が指導方法の特徴を説明しながら、プレゼンテーションをさらに進めていくと、保護者は全員、プレゼンテーションを目にしながらその説明に聞き入っている。野球をしていたたかし（仮名、静止画像 E 真ん中にある車に手をかけている子ども）とあきおがそれぞれ車に乗ろうとしている静止画像 (E,F) が提示されると、あきおの保護者が「乗ったんだ」と小さな声でつぶやく。一方、たかしの保護者は終始、無言で表情を緩めながら画像を見つめている。

ここでは、野球のボールを持ち込んだふたりの子を主人公にして静止画像と説明を構成した。ボールを持ち込んだあきおの保護者は最初、あきおは野球を好きであることを伝えているが、後半ではチーフの指導者の説明に聞き入りながら、プレゼンテーションを見つめている。もう一方のたかしの保護者はことばを発していないものの、表情を緩ませながらプレゼンテーションを眺めていた。たかしは、以前、一緒に野球ごっこをしていたあきおの後を追うことが多く、それをこの保護者は気にしていた。そのようなたかしが自分から先に車に乗ったことが保護者にとってはうれしかったのではないかと思われる。

3.3. 子どもの行動と気持ちについての保護者の反応

3.3.1. 製作したプレゼンテーション資料

子どもの行動とその気持ちについて伝えるために、5つのシーンを取り上げ、プレゼンテーション資料を製作した。このうち、シーンの読み取りについて、注意を払って製作した、以下のプレゼンテーション資料を検討する。

これは、2005年5月31日の小集団指導で観察され、子ども達や指導者が乗る車を先頭の子が動かし始めたシーンを取り上げたものである。車を動かしたとたんにブロックがはずれて、先頭の子が後ろを向いてけわしい表情で叫んでいる。全体で20秒間である。このシーンは、子どもが苦労しながらがんばっているシーンを取り上げたものである。ただし、ブロックがはずれてしまう、という失敗あるいは否定的場面としても認識できるだけに、その情報提供にあたっては保護者にそのように認識されないように注意を払って製作したプレゼンテーションである。図3が制作したプレゼン

テーション資料である。3枚の静止画像 G, H, I を使い、題名の④「さあ、しゅっぱつ〜、と思ったら。」は先頭の子の気持ちを表現している。説明文の「残念！！」は、「はずれて残念だったね。」という著者の気持ちを記したものである。3枚の静止画像のうち、まず1枚目のGには先頭の子が後ろを気にしながらスタートしたカットを、次にブロックがはずれてしまったカット (H) を、そして、最後に後ろを向いて叫んでいるカット (I) を提示する。これらは図2と同様に、矢印の順番に1枚のシートに重ねて提示した。

3.3.2. 保護者の反応

図3のプレゼンテーション資料に対する保護者たちの反応は、次の通りである。

著者が「たろう（仮名）ちゃんには、ごめんなさいなんだけど……」と前置きし、笑顔でプレゼンテーションを開始し、「先頭のたろうちゃんが一生懸命がんばって、みんなが乗っている車を動かそうとしたら、ブロックがはずれちゃったのね。残念！」といいながら、3枚の静止画像 G, H, I を順番に提示していくと、保護者、指導者から笑いが起こる。すかさず、たろうの保護者が目を大きく開いて照れたように笑いながら、「たろうにしたら、自分が動いたのに、なんでみんながついてこないのよおーって感じだったと思うの」と言う。

先に述べたように、このシーンはブロックがはずれてしまう、という失敗場面として認識される予測がたつ場面であり、その製作には留意し、結果として保護者達の笑いを引き出すことにつながっている。そして、たろうの保護者は自分の子どもの視点にたって気持ちを伝えているのが特徴的である。その保護者の表情も笑顔であり、このシーンが保護者、指導者というその場に参加している全員によって肯定的に受け入れられていることがわかる。なお、みんなが乗っている車の先頭で一生懸命に車を動かしているたろうの様子と類似した場面が第1回目のビデオ映像でも提供されている。その時も指導者や他の保護者がたろうががんばっていることを伝えると、この保護者は笑顔でビデオ映像を眺めていた。ただし、子どもの気持ちについての言及はなかった。

4. 総合考察

4.1. 静止画像による情報提供の効果

本研究では、著者が保護者へ伝えたいことを明確にするために、ビデオ映像から静止画像を作成し複数枚をセットにして情報提供した。子どもの行動の変化と

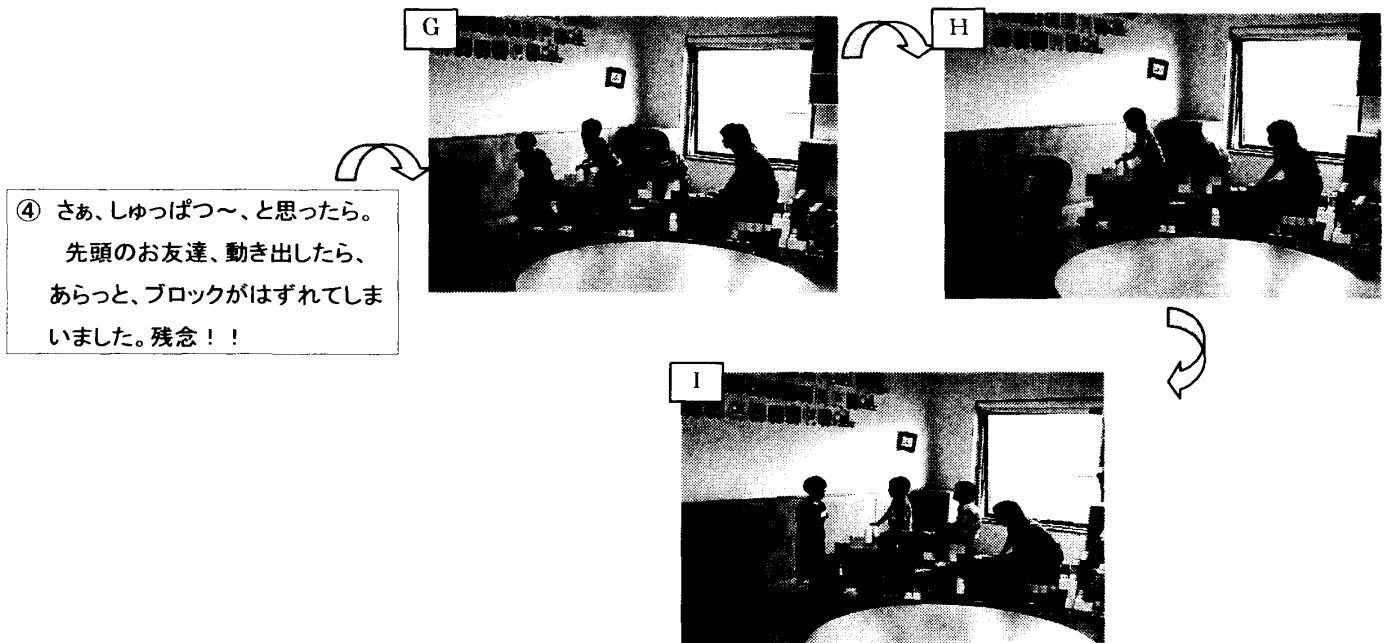


図3 子どもの行動と気持ちについてのプレゼンテーション資料

そのプロセスについて情報提供した際の保護者の反応からは、次のような効果を確認することができた。

主人公となっているふたりの子の保護者は著者が伝えようとした子どもの行動の変化を認識し、喜んでいった。その認識は、例えば、あきおの保護者の「あきおがもってきたんだ」「乗ったんだ」という発話に現実味をもって表されている。特に、たかしの保護者に対しては、EとFの2枚の画像によって、たかしが自分からあきおよりも先に車に乗ったことを確認できたことが効果的であったと考える。さらに、その「先に乗った」という情報をその場にいた他の保護者とともに共有化できたことが有効であったといえる。

このような情報は、ビデオ映像では情報量が多いために見逃してしまう場合がある。また、複数の子ども達が登場する場合、保護者は自分の子どもに視線を注ぐので、同じ映像を視聴していても情報の読み取りには個人差が出る。これに対して、静止画像ではポイントを押さえて情報を伝えていくことができる。清矢(2001)は、視聴覚機器を「現象」を複数の人の間で共有化するための手段として位置づけている。たかしの保護者の事例からは、静止画像が清矢のいう共有化の手段として有効であったことを示していると考えられる。

また、「先に乗った」という情報を提供するには、時間の流れを考えにいなければならない。本研究では、ビデオ映像の連続記録を静止画像により「瞬間(1カット)」の記録に変換する作業を行った。そして、「瞬

間」と「瞬間」をそれが生じた順番に並べて提示することにより、時間の流れ、すなわち現象の変化を示すようにした。これにより、保護者が子どもの行動を理解しやすいうように配慮した。「先に乗った」ということを表すには、2枚の静止画像で充分であり、ビデオ映像よりも効率的に情報提供することができる。このように、静止画像は連続記録によるビデオ映像と同じ情報をより効果的かつ効率的に保護者へ情報提供することができた。

ところで、授業研究の分野では藤岡(1991)によって授業を記録したビデオ映像をストップモーション(一時停止させる)で検討するストップモーション方式が提唱されている。その長所として、授業研究の討論が事実即してなされるという実証性や、課題を共有し定式化できるという生産性、誰でもが討論に加わられるという平等参加、の3点がある。本研究のビデオを静止画像にすることは、ストップモーション方式と類似性が高く、特に実証性や課題(話題)の共有化については同じ特徴をもっているといえる。しかしながら、この方式がその場面に参加しているだけでも任意に特定場面にストップモーションをかけられるのに対して、本研究の静止画像による情報提供では指導者の側が保護者支援にとって必要と考える場面を抽出している。この点については、むしろ吉崎(1997)によるVTR中断法との類似性が認められる。VTR中断法では、授業者が重要と考える場面を選び、話し合いが進められる。今回の研究では、指導者の側の伝えたい

と考えたことを選んだが、今後、保護者との相互理解を深めるには、ストップモーション方式のように保護者がプレゼンテーションに取り上げる場面を選ぶことや、プレゼンテーションを製作し発表する形態も考えることができる。それによって、保護者が子ども理解において大切にしている視点を指導者が理解することができると思う。

ところで、ストップモーション方式とVTR中断法は、授業研究という教師や子どもの発話が検討の中心となるのに対して、静止画像を連続して提示する本研究の方式は、発話に加えて行動や活動といった身体的要素を検討の中心においている。その意味では、本研究の場合、子どもの行動、そして行動変化を対象化しており、その変化を表すためには静止画像を連続提示する方式が有効であったといえる。なお、巖淵(2005)は障害のある人の介護にあたる人たちが情報を共有する技術として、本研究と同様に連続する複数の静止画像を1つにまとめたアニメーションを活用している。たとえば、車イスへ移動する介助方法をアニメーションにしているが、そこではやはり動作や行動による「介助」が対象とされている。

4.2. 静止画像に短い説明文を添えた情報提供の効果

今回の情報提供では、著者の指導活動への意図を明確にしていく上で、その状況や、子どもの気持ちを読み取った短い説明文をつけた。ここでは、マンガの手法を参考にした。マンガは子どもだけではなく大人にも好まれる表現媒体である。マンガはビデオ映像の静止画像が線に加工され、それに音声や文字化されて添えられたものとして考えることができる。さらに、マンガには場面の解説も文字として付け加わり視覚情報となって同時に提示されている。そして、1コマ1コマを連続して提示することにより読者の関心を高めている。その文字情報は短いのが特徴である。本研究においても著者が子どもの気持ちを読み取ったことを短く添えたことが、たろうの保護者に著者の意図を容易に理解させ、自発的に発話を始めさせたことにつながったと考察される。

古市ら(1997)はビデオ録画にあたって、子どもの心が見えとり方をしなければ資料としての価値、すなわち本研究で意味する情報としての価値はないと述べている。たろうの保護者は類似したビデオ映像の場面では見せなかったたろうの気持ちについての発言を自発的に静止画像の場面で表出している。このことは、静止画像、そして、静止画像を連続して提示すること、

そこへ子どもの気持ちを強調したテキストを添えることによって引き出された反応であり、その有効性を認識できる。古市らの述べる「子どもの心が見える」情報の提供にかかわっては、録画されたビデオ映像を加工する方法も一考されてよいと考える。

発達心理学研究では、映画フィルムなどの連続的記録を用いた論文が1970年代中盤から見られる。たとえば、TREVARTHEN *et al.* (1978) は母子のかかわりのプロセスを詳細に行動分析するために写真を使用しているが、それは映画フィルムの1コマを陽画紙に焼き付けたものである。そして、2～5枚を1セットにして論文に提示している。本邦においても、近年の質的研究の台頭に伴い写真やビデオ映像が論文に掲載されるようになった。たとえば、鯨岡(1989)はGRAY(1978)らの手法を参考に母子のかかわりの様子をエピソードとして文章で記述し、そこへビデオ映像の静止画像や画像の輪郭をなぞった挿絵を複数枚加えている。これらはいずれも文字が主体となり、写真やビデオ映像は補足的に用いられているのが特徴である。それは、これらの研究が大藪・越川(2000)のいう「内部的観点」、すなわち、子どもやそこにかかわる大人の気持ちの理解をテーマとしているからである。そのために観察者(エピソード記述者)のその状況や子どもの行動の背景にある内面の理解を表現できる文章記述が中心になっていると考えられる。

本研究では、保護者自身が観察者となるようにビデオ映像から製作した静止画像を主とし、説明文は短いものにした。つまり、保護者がその時の子どもの気持ちの読み取りをできるように、著者の読み取りは補足的にした。それは、「私はたろうちゃんの気持ちを○○のように理解しましたが、いかがですか？」という著者から保護者への問いかけを間接的に行うことであり、それに対するこたえを保護者が表明できるようにするためである。このことは、保護者が著者から提供されるさまざまな情報を自分自身で読み取ることを可能にする。そうすることによって、著者が子どもの行動をどのように理解したか、あるいはどのように指導したかという一方的な情報提供にとどまらず、保護者の意見も尊重し相互理解を進めることができると考えた。すなわち、ビデオ映像の静止画像という多くの人に共通に可視化できる情報を保護者と著者が共有し、そこへ著者の読み取りを補足的に示すことにより、保護者が著者の情報の読み取りについての理解を主体的に進めることができると考えたのである。

今回の研究では、以上のように著者の意図を保護者に理解してもらうこと、そして、保護者の考えを引き出すことができた。しかし、本研究は特定の場面における保護者の限られた反応を検討したものであり、内垣戸ら(2005)が検討している質的研究が抱える「研究の妥当性」や「研究の一般化可能性」にかかわる課題がある。また、南(1997)が述べているように、観察による限られた事例を扱った研究の場合、結果の過剰な一般化や因果関係の特定を行うことがあってはならない。

本研究では、保護者の2つの反応から静止画像による情報提供とそこに添える短い説明文による情報提供の効果について検討を行った。今後さらに検討を深め、保護者と指導者の相互の対話を深める、相互理解を深めるための情報提供について考察するためには以下のことが求められていると考える。

それは、どの場面を取り上げるか、そして、それをどのくらいの枚数の静止画像に加工するのか、それらを重ねて提示したらよいのか、あるいは1枚1枚のシートで提示した方がよいのか、といった内容面から技術面といった多岐に渡る課題があげられる。そして、静止画像による情報提供の効果について、保護者へインタビューを行ったり、質問紙調査を実施することにより、今回、得られた結果の妥当性を検証することも必要である。また、同じ内容についてビデオ映像と静止画像の両方で情報提供を行い、保護者の反応を比較検討することにより、本研究で得られた結果が静止画像特有の効果となるのかを検討することが求められる。

ビデオ映像を用いたビジュアルエスノグラフィーの手法(TOBIN, WU and DAVIDSON 1989)では、ビデオ映像は単なるデータとしてではなく関係者の対話を引き出す最初の声として捉えられているが、今回、試みた静止画像による情報提供は著者が保護者との対話を引き出すための教材としての可能性をもっていると思われる。今後、さらに対話が活発になるためのビデオ映像を用いた情報の編集、加工について検討を深め、上述した課題に取組み、教育場面における保護者への情報提供をより有効なものにしてゆきたい。

謝 辞

この指導実践と一緒に取り組んで下さいました療育機関の職員のみなさま、そして、子どもさんと保護者のみなさまへ心よりお礼申し上げます。なお、写真の掲載にあたっては保護者のみなさまに許諾をいただ

ています。また、本研究をまとめるにあたりご協力いただきました北海道教育大学教育実践総合センターの高久宏一先生に深謝致します。どうもありがとうございました。

本研究は、平成17～20年度文部科学研究費補助金・基盤研究(C)(課題番号17530683, 代表・渡部信一)および、平成17～19年度文部科学研究費補助金・基盤研究(B)(課題番号17330158, 代表・生田久美子)の援助を受けている。

参 考 文 献

- 藤岡信勝(1991) ストップモーション方式による授業研究の方法. 学事出版, 東京
- 古市久子, 遠藤 晶, 松山由美子(1997) ビデオ観察研究におけるデータ抽出時の問題点について. 大阪教育大学紀要 第IV部門, 45(2): 263-277
- 後藤 守, 小笠原詠子, 後藤恵美子, 福原真理子(1984) 行動空間療法の体系化に関する研究. 北海道教育大学紀要(第一部C), 34(2): 77-86
- GREY, H. (1978) Learning to take an object from the mother. In A. Lock (ed.) Action gesture and symbol. New York: Academic Press, pp.159-182
- 堀田博史, 堀田龍也, 石塚丈晴, 高橋 純(2005) 幼稚園 Web で発信されている情報の変化～2000年と2005年での経年調査. 日本教育工学会第21回全国大会講演論文集: 863-864
- 石塚丈晴, 堀田博史, 堀田龍也, 高橋 純(2005) Web で積極的に発信している幼稚園及び小学校 Web サイトにおける保護者向け情報の分析. 日本教育工学会第21回全国大会講演論文集: 861-862
- 巖淵守(2005) 情報を共有するための技術, e-PP(Electronic Personal Profiler). 発達, ミネルヴァ書房, 京都, 103: 32-35
- 鯨岡 峻(1989) 初期母子関係における間主観性の領域. 鯨岡峻, 鯨岡和子訳 母と子のあいだ. ミネルヴァ書房, 京都
- 南 博文(1997) 3章 参加観察法とエスノメソドロジーの理論と技法. 中澤 潤, 小野木裕明, 南 博文編著 心理学マニュアル, 観察法. 北大路書房, 京都
- 小川博久(1994) 保育研究における映像使用の効用と限界, マイクロジェネティックアプローチの問題を含めて. 発達, ミネルヴァ書房, 京都, 58: 25-32
- 大藪 泰, 越川房子(2000) 訳者あとがき
- PELLEGRINI, A.D. 子どもの行動観察, 日常生活場
- 日本教育工学会論文誌 (*Jpn. J. Educ. Technol.*)

面での実践. 川島書店, 東京

- PELLEGRINI, A.D. (1996) *Observing Children in Their Natural Worlds : A Methodological Primer*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc. (大藪 泰, 越川房子 (2000) *子どもの行動観察, 日常生活場面での実践*. 川島書店, 東京)
- 清矢良崇 (2001) 第1章 研究者がAV機器を用いるのはなぜか. 石黒広昭編 *AV機器をもってフィールドへ, 保育・教育・社会的実践の理解と研究のために*. 新曜社, 東京
- TOBIN, J., WU, D. and DAVIDSON, D. (1989) *Preschool in Three Cultures : Japan, China, and the United States*. New Haven : Yale University Press
- TREVARTHEN, C. and HUBLEY, P. (1978) *Secondary intersubjectivity : confidence, confiding and acts of meaning in the first year*. In A. LOCK (ed.) *Action gesture and symbol*. New York : Academic Press, pp.183-229
- 内垣戸貴之, 中橋 雄, 浅井和行, 久保田賢一 (2005) *教育工学における質的研究法に基づいた論文の分析*. 日本教育工学会論文誌, 29(4) : 587-596
- 渡部信一, 小山智義 (2002) *3DCGを用いた行動研究法の開発*. 東北大学大学院教育学研究科・教育ネットワーク研究室年報, 2 : 3-12
- 吉崎静夫 (1997) *デザイナーとしての教師・アクターとしての教師*. 金子書房, 東京

Summary

In this research, an attempt was made to process video images for communicating information on the instructional situation to parents in an easy-to-understand, efficient manner. More specifically, target scenes were extracted -- as a series of still images -- from video images of a scene of small-group instruction, and presentation materials were created by adding to the pictures text explaining the child's feelings and situation. The responses of guardians were studied from records in the daily instruction log, and as a result it was found that: (1) Parents can be made to recognize the changes in behavior of their child which the instructor is trying to communicate, (2) Parents can spontaneously apprehend the feelings of their child, and verbalize them. Due to these results, it is thought that the information which the instructor wishes to communicate can be clearly communicated by extracting video images as still images which are records of "single moments (1 cut)", presenting these moments in sequence, and adding instruction to them.

KEY WORDS: VIDEO IMAGES, PARENTS, INSTRUCTIONAL MATERIALS, STILL IMAGES, INFORMATION PRESENTATION

(Received February 10, 2006)